



「1973年(昭和48)6月、
梨畑の中に白い4階建ての公民館、
図書館が開館した。」

(『稲城市立図書館開館20周年記念誌 資料編』より引用)

稲城市立図書館ができてから50年立ちました。皆さんのご両親が産まれる
もっと前からここにあった図書館。ここで歴史をふりかえってみましょう。

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1973.6 第一図書館開館 | 2006.7 中央図書館開館 |
| 1973.10 児童室「お話し会」
始まる。 | 2006.7 YA広報誌『ホレロ〜ダ』
倉1刊 |
| 1975.4 第二図書館開館 | 2009.10 i7ラザ図書館開館 |
| 1979.4 第三図書館開館 | 2021.7. 中央図書館開館15周年 |
| 1983.5 第四図書館開館 | 2023.6 稲城市立図書館
開館50周年。 |



新着案内

新しいYA本続々と入りますよ!

『ひとりあそびの教科書』 ¥159.7/冊
宇野 常寛 著, 河出書房新社

『ハーバスト』 ¥913.6/冊
花里 真希 著, 講談社

『偏差値45からの大学の選び方』
¥377.2/冊
山内大地 著, 筑摩書房

『増えるものたちの進化生物学』
¥467.5/冊
市橋 伯一 著, 筑摩書房

5月3日ですが、
稲城市立中央
図書館で『外
語読モダン』が
開架作業終了。
今日は府中高校の
方から写真撮影に
協力してくださったの
ですが、その姿と
雰囲気は本当に
良かったです。ある
有名な写真家のエッセ
イが、と頭はよび
ました。好きなことは
熱中する姿、と、
良いですね。

(図書館スタッフより)

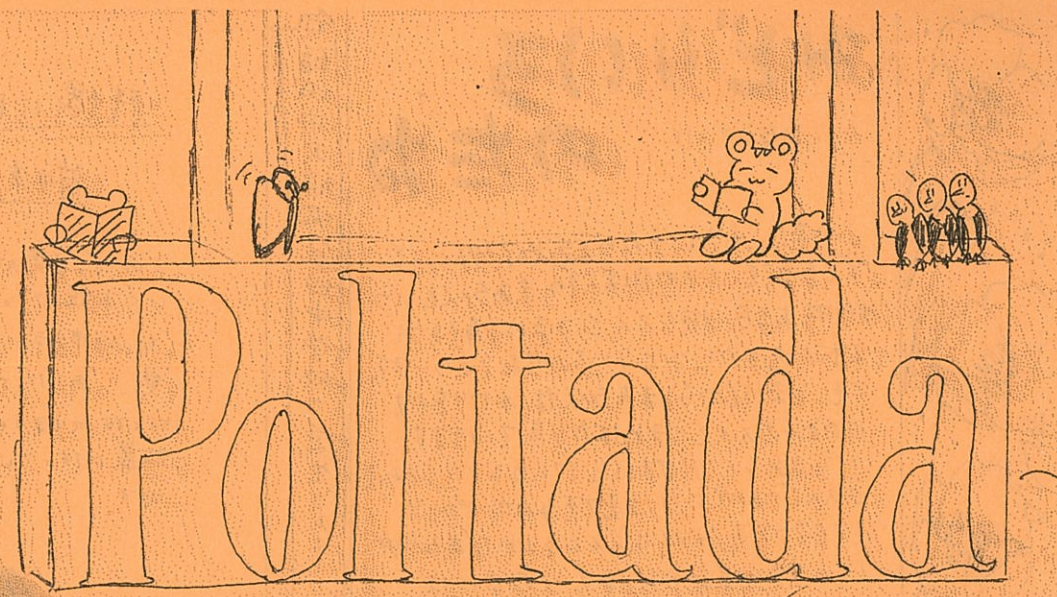
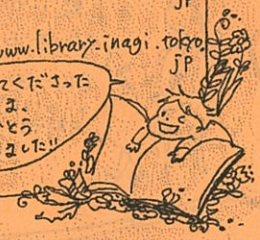
YA広報誌

『ホレロ〜ダ No.67』
2023年5月発行
編集: YAボランティア
実習にいらした
学生の皆さん

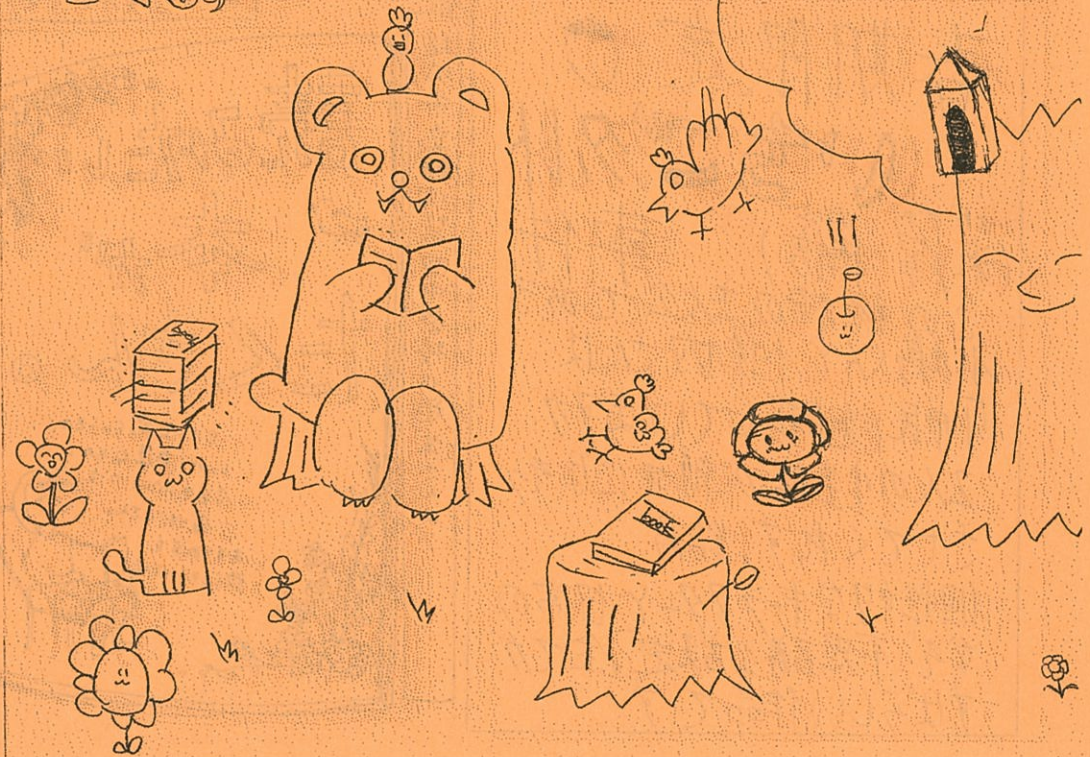
稲城市立中央図書館
(向陽台4-6-18)
TEL: 042-378-7111
FAX: 042-378-7162

MAIL:
inagilib@library.inagi.tokyo.jp
HP:
https://www.library.inagi.tokyo.jp

協力してくださった
みなさま、
ありがとうございます!!



No.67





みどりいろのたね

たかどのほうこ・作

この本は、小さい子から読めて「アッ」と笑える本です。この本の登場人物、まあちゃんという女の子。ある日、X田にえんどうまめを育てようと学校の先生から、みどりいろのたねをもらいます。でも、なまけものな、まあちゃんは、水やりをせずほかの子のえんどうまめばかり育てていきます。そしてまめをとる日が来ました。そこにはなせかまあちゃんのえんどうまめも育っています。でもな人が、ピカピカしてるんです。この本には、えんどうまめと「ある物」がしつこく合う場面があります。この本には、フシギな事が起きるし絵もおもしろいのですごく楽しめます。ぜひ読んでみてください。

稲城市立稲城第四中学校の学生さんより

残像に口紅を

筒井康隆

これは、言葉がほとんど消えていく小説です。

「あ」が消えると、「ありがとう」や「愛」、「あはれ」などという言葉もなくなってしまうので、しつこくに乱暴に読んでいくのが怖い小説です。



お前

YAボランティアさんより

『君に届け』シリーズ

原作 椎名軽穂
作 下川香苗



見た目が真子みたいでみんなから怖がられていた主人公の黒沼爽子。だけど本人は明るくて感動屋。クラスにもしもうとするけれどいつも空回りしてばかり。そんな時かけへだてなく接してくれる人の男子が現れ、爽子は強い憧れを持ちます。巻を重ねるごとに成長していく爽子を好きにならすにはいられないはず！椎名軽穂さんのかわいい絵にもご注目ください♡



駒沢学園女子中学校の学生さんより

春期限定 いちごタレ

事件 (米澤 穂信) この物語の主人公である小嶋くんと小佐内さんは「市民」を目指していますが、2人の小性格が簡単にはあきらめさせてくれず、結局個性的なキャラクターと日常のなぞ、不思議な設定。全てがすばらしい作品です。

稲城市立稲城第四中学校の学生さんより

読みたい本がたっさん。

YAボランティア募集中

年に4回発行している広報誌『ホルターダ』を制作していただく中高生を募集中です。興味のある方は気軽に中央図書館までお問い合わせください。

アッといふくらい、しつこく重厚なモノ。今日ホルターダは盛りだくさん。おすすめ本を教えてください。



QRコードをX-1で作成可能です。



羅生門

著 芥川 龍之介
現代語訳 松尾 清貴

一 荒れ果てた門の上で 男は地獄のような光景を見る。

物語の舞台は平安時代、京都の羅生門。仕事を失った男は行くあてもない。羅生門の楼上で一晩を過ごすことになる。そこには多くの死体と、死体から髪を抜く老女がいた。そして物語は男と老女のやり取りを中心に進んでいく。生きるための愚行、について考えるならば是非読んでみてください。

駒沢女子大学の学生さんより